

防潮保安林が津波被害軽減か

林野庁 検討会で効果を検証へ

新舞子浜の海岸沿いに長く延びるクロマツの防潮保安林が、東日本大震災の津波による家屋などの被害を軽減させたのではないかと、という声が沿岸の住民から聞こえる。磐城森林管理署によると実証はされていないが、林野庁では21日にも検討会を立ち上げ、防災林としての効果を検証する方針を打ち出した。さらに松を植林した江戸時代の磐城平藩内藤家の先見の明をたたえる声も一部の市民と、姉妹都市・宮崎県延岡市の内藤家顕彰会から上がっている。

いわきにおける保安林で約89年もの防潮保安林の始まりは諸説いろいろとあるが、市勿来園文学歴史館の脇坂省吾学芸員によると、17世紀に磐城平藩の内藤家が植林したのが始まりとされる。新舞子浜では県道豊間四倉線の沼ノ内、四倉町間で同管理署直轄の国有林だけでも南北約7キロ、幅で最大290メートル、全体

だが、保安林が海を遮へいする内陸側の家屋では被害が軽減されたという住民の声が聞こえる。夏井川河口の平下大越に住む農家では、ひざ部分まで波が押し寄せハウスの田畑に被害を受けたが、「防潮林の効果は実感があつた。林がなかったら家の1階は駄目だった」と家主の男性(63)。海



新舞子浜の県道沿いに延びるクロマツの防潮保安林

 岸まで100メートルしかなく、波の勢いでブロック塀や車が流された平沼ノ

内の主婦(60)は「1メートルの高さまで押し寄せたが、林がなかったらもっと被害があつたと思う」と話す。防潮保安林のない区域に比べ、同区間で

景には、海岸に平行して流れる横川や県道沿いに点在する沼地、平沼ノ内の滑津川が津波の勢いを弱めたのでは、という地元の声もある。
 同管理署では実証には時間がかかるものとしており、同庁では検討会を開催し、被災状況の把握と効果の検証などを実施していくという。
 また、保安林は内藤政長公の法名から「道山林(どうざんりん)」と呼ばれ親しまれているほか、今回の震災では内藤家時代に作られた小川、愛谷江筋も断水に苦しむ市民を助けたことから、延岡市の内藤家顕彰会では市内で内藤家を顕彰する「いわき奉仕団」より情報を得、地元新聞に政長公の先見の明をたたえる文を寄稿。同奉仕団の大野倫子婦人部長も「今後も偉業を伝えていきたい」と話している。